

でも、ちょっとデッサンがおかしくても、ひげがいびつでも、色が単調でも、1本1本丁寧に愛情込めて紡がれた線は、それらが“味”や“個性”へと変換され、一枚の紙から“温度”を感じる作品が出来上がる。そこに上手い下手はあまり関係ない。最後まで楽しく丁寧に仕上げるのが大切で、技術はあとからいくらでもついてくる。そして“楽しい”という気持ちが技術を向上させる重要なエッセンスになる。

本書は色鉛筆画の描き方を記した本ではあるけれど、何度も成功と失敗、トライ& エラーを繰り返し発見した自己流の描き方で教科書通りではありません。というか、本来絵を描くのに厳密なルールやマニュアルなんて存在しません。身も蓋もない言い方をすれば、楽しく描ければどう描いても良いんです。

すでに色鉛筆画を描いたことがある人は、こういう描き方もあるんだと軽く読み流してもらえば良いし、色鉛筆画を全く描いたことのない人にとっては、どこからどうやって描けば良いかわからないと思うので、そういう方にはひとつの道しるべになれば良いなと思います。

この本があなたの最愛の猫を描くきっかけとなれば著者として大変嬉しく思います。